

第 55 号

会報

青山学院大学
日本文学会

2021 年 3 月 15 日

(題字) 湯池 孝先生



「無」教養主義の時代を生きる

土方 洋一



十代の頃に同年代の従兄弟とともに上京した。祖父は海軍兵学校に入り、後に対馬沖でロシアのバルチック艦隊と相まみえることになるのだが、この祖父のことは今は措く。

祖父とともに上京してきた従兄弟のことである。彼は第一高等学校から東京帝国大学に進学し、学問の道に進んだ。仲のよかった二人の進路が海軍と帝大（文学）とに分かれたあたり、司馬遼太郎の『坂の上の雲』における秋山真之と正岡子規の関係に似ていて、ちょっと面白い。明治の地方青年の立身の一つの型だったのかもしれない。祖父の母方の従兄弟なので、土方姓ではなく阿部姓で、名は次郎という。阿部次郎は後に夏目漱石に私淑し、漱石山房に出入りするようになった。阿部次郎が大正三年に発表した『三太郎の日記』は、大正教養主義のバイブルとして広く読まれた。

生きるための職業は魂の生活と一致するものを選ぶことを第一とする。しからざれば全然魂と関係のないことを選んで、職業の量を極小に制限することが賢い方法である。魂を弄び、魂を汚し、魂を売り、魂を墮落させる職業はもつとも恐ろしい。（『三太郎の日記』）

阿部次郎の兄弟はみな秀才で、学者になった人が多い。末弟の阿部六郎は京都帝国大学へ進学し、やがて旧制成城高校のドイツ語の教師となった。成城高校で阿部六郎の教えを受けた人に、大岡昇平や安部公房らがいる。いま『阿部六郎全集』全三巻（一穂社刊）を拾い読みしているのだが、著者の「感受性のみずみずしさと、魂の純粋さ」（大岡昇平）が伝わってきて、その人柄が偲ばれる。

音楽批評で名をなした吉田秀和は、成城高校に入学した頃、早くドイツ語が上達したくて、阿部六郎の成城の家に下宿していた。

ある時、阿部六郎夫人が急逝した。成城の小さな教会で、告別式が行われた。吉田秀和はすでに阿部家を出て一人住まいをしていたが、告別式の後、阿部先生を誰も

いない自宅に一人で帰す気になれず、行をともした。自宅に帰ると、阿部先生は黙って書斎に入ってしまった。吉田秀和は悲しくてたまらず、ふと目に入った、夫人が愛奏していたピアノの蓋を開けて、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第十四番「月光」を静かに弾き始めた。第一楽章が終わり、吉田がそのままなだれていると、書斎の扉が少し開いて、阿部先生の声が聞こえてきた。「もう一度、弾いてくれないか」。吉田秀和は再び、「月光ソナタ」の第一楽章を心をこめて弾き始めた。（吉田秀和『音楽の光と翳』）

何かが言いたいわけではなく、ただ心に浮ぶよしなしごことをこまで書きつづってきたにすぎない。ただ、「教養」ということを考える時に、ここに記したようなかすかに僕と血のつながっている人や、その人とゆかりの人びとの面影が、僕の脳裡に去来するということを述べようとしたばかりである。先の国語辞典の説明とはいささかずれるかもしれないけれど、「教養」とは、生きがたい人生を生きている僕らを慰撫し、支えてくれるもののような気がしている。

「教養」ということばをあまり耳にしなくなった。もつとも、「教養」ということばの意味するところも、今ひとつ判然としない。辞書には、「学問、知識などによって養われた品位。教育、勉強などによって蓄えられた能力。知識。文化に関する広い知識」などとある（『日本国語大辞典』）。「能力、知識」はともかく、「品位」が問題にされない時代になったということだろうか。僕の父方の祖父は山形の片田舎の出身だが、長男でなかったため、

古典語の意味を計算する

近藤 泰弘



単語の意味というのは非常に複雑なものだ。それを分析しようとする試みはソシュール以来、言語学为中心的課題のひとつであったといっている。私が学生時代に一世を風靡したのが、服部四郎氏が提唱した「意義素」という考え方である。音韻の場合の「音素」と同じように、意味にも「意義素」という抽象的なものがあり、それを合成して文の意味ができていくというような考え方である。「冷たい御飯」とは言えるが「寒い御飯」

とは言えない、または、「寒い一日」とは言えるが「冷たい一日」とは言えない、などのコロケーションについて、それぞれの意義素に共通できない性質が含まれているというような説明が可能になる。また、さらに、構造主義の流行の中で、すべてを二項対立で説明するという観点から、意義素も二項対立で記述できるのではないかとという考えも生まれた。例えば、「国の主+、男+」なら「王 (king)」であり、「国の主+、男-」ならば、「女王 (queen)」であるというような記述方法である。この場合だと、性別で言えば、男性性を有標ということにして記述してあるわけだが、これも、やはり「音素」に習った考え方であり、構造主義的言語観を適用していく方法であった。しかしながら、当然のようにこの方法には限界がある。「冷たい」と

「寒い」の関係と、「暖かい」との関係はどうなのか。この場合には「温かい」と「暖かい」と漢字で使い分けられるような気もするが、「冷たい」と「寒い」のような別の語は存在しない。では「熱い」や「暑い」はどこに入るのか、と考えていくとこんな単純な温度の語彙体系ですら、意義素的な記述方法は非常に難しいことはすぐにわかると思う。

ところが、近年、いわゆる人工知能 (AI) の研究の中で、単語の意味を、従来とはまったく違うアプローチで記述する方法が開発された。Google の研究者が開発した word2vec というプログラムを使うと、あるまとまった文章 (小説程度の大きさから、新聞数年分など範囲は自由) を使って、その中にある単語の分布 (何と何が近くにくるか) だけを用いて、単語の意味を記述できるというのだ。これは先の「冷たい御飯」と「寒い一日」の差から類推すればわかるだろう。この例でたしかに「冷たい」と「寒い」の (同時に「御飯」と「一日」の) 持つ意味の一部は見えてくる。先の「王・女王」では2つの弁別特徴で意味を記述したが、この word2vec では、深層学習によって、1単語に100個

ぐらいの特徴を抽出し、それぞれを12だけではなく、0から1までの確率で表現する。であるから、ひとつの単語の持ちうる状態 (意義素) の幅はとてつもなく大きい。また、それは人間が見ただけでは、何の意義を示しているかはわからない。しかし、驚くべきことに、この特徴値は単なる数値 (100次元のベクトル) なので、加減算が可能なのだ。よくあげられる例であるが「フランス・パリ+東京」の演算をすると、答えは「日本」となるわけなのだ。現代語ならば、まあ、そんなもので済むが、これが古典語でできるとなると話は違ってくる。古典語においては、我々は内省が効かないので、例えば、『源氏物語』で、「内侍+女+男」「桜+春+秋」をしたら、何になるかと言われてもわからないわけであるが、word2vec の出力の単語ベクトルで計算すれば、当時の「語感」で「内侍」の男性バジョン、「桜」の秋バジョンは何か? という答えが得られることになるのである。これは革命的なことであることがお分かりになると思う。現在、平安時代語全部のコーパスから word2vec 単語ベクトルを作っているので近いうちにその結果をお見せすることができたらう。

山の木々、櫻、桜、公孫樹

山下 喜代



一九九六年の春に着任して以来、今年で二十五年になる。二〇二一年の三月には定年退職を迎えるが、思い返せば、長いようで短い年月だった。日々の仕事に追われ、いつも落ち着かないざわざわとした心持ちだった気がする。

そんな日々には、キャンパスでふと立ち止まって見上げた木々の緑や黄葉。着任後の数年通った厚木キャンパスは、通うのが大変だったが、「山」のキャンパスに着けばそこは別天地。いつも小旅行気分

で、山の木々を楽しんでいた。相模原キャンパスの新緑の季節には、一週間ごとに見上げる櫻がむくむくと緑の葉を茂らせ日の光に輝いていた。青山キャンパスの春の桜と秋の公孫樹。思い出の中のキャンパスはいつも自然にあふれ美しい。研究室を出て授業に向かう時は、鏡の前に立ち、心の中で「よっしゃ」と気合を入れる。そんな毎日だった。そして、授業が終わると、授業の前に比べて、いつも元気になっていった。一種の高揚感があって、これなら大丈夫という気分になったものだ。何が「大丈夫」なのか、自分でもよく分からなかったが。

最近はどうだろうか。最後の年が、思ってもいなかったオンライン授業になってしまい、授業の前に「よっしゃ」と気合を入れることもない。パソコンに張り付くよ

うにして話す授業では、高揚感もどこかへいつてしまおうようだ。

授業はやはり「ライブ」がいい。日本語教育の演習や実習では、グループワークなど学生主体の活動が中心であった。四年生の実習では、毎年、交換留学生を対象とした「日本語中級会話クラスの開講」を目標に授業計画の立案と教材の作成などの準備を重ね、十一月に本番の授業を行ってきた。授業計画も教材も学生がゼロから作成する。毎年、ビデオ教材を作成するグループも多く、内容の決定から、実演、撮影、編集とすべて手作りである。台詞のぎこちなさにダメ出しをすることもあったが、回を重ねるごとに洗練され、なかなかの出来栄である。絵の得意な学生が見事な絵教材を作成したこともあった。三、四回にわたって行う本番の実習授業は、私の中では、年間の一大イベントである。今年、この実習もオンラインで行うことになった。交換留学生の受入が中止になり、対象も学部留學生になった。「日本語上級語彙クラスの開講」と内容も大きく変更した。学生たちは模擬授業で練習を重ね、準備に余念がない。きつ

と本番でも良い授業をしてくれるだろう。卒業生との話で、この実習の授業が話題になることが多いた。大変だったが、良い経験だった。私にとっても、印象深い、良い思い出となることだろう。

日本語教育コースの一期生が二〇〇〇年三月に卒業して以来、実際に日本語教育の現場で仕事をしている卒業生も大分多くなった。日本国内はもちろん、韓国、中国などの東アジア、北米、南米、欧州と、活躍の場は広がっている。また、学校の国語科教員、大学の国際交流を担う職員、或いは企業などの職場で活躍している卒業生の話を耳にする。すでに、中堅の働き盛りとなった人たちも多いだろう。私の思い出の中では、彼らは、グループ活動で熱心に話し合う、或いは緊張した面持ちで実習の授業をする若い学生のままとも言えるのだが、毎年届く年賀状や風の便りで知る彼らの活躍と幸せな生活は、私に安堵と幸福感をもたらす。

これからは、この二十五年の思い出に浸り、ゆったりとした時間が過ぎていくことだろう。それもまた、幸せな日々と言える。

日本文学会秋季大会

ご講演・山本啓介先生

「私の卒業論文——字余り歌について——」

博士後期課程三年 岡島 由佳

二〇二〇年十一月二十一日(土)、青山学院大学日本文学会秋季大会が開催された。新型コロナウイルスの感染拡大により、今回はオンライン会議システムWebex Meetingを利用して行われた。一年半ぶりの大会に多くの人々が集い、つながり、有意義な時間を過ごした。

当日は、本学の出身である日本文学の山本啓介先生に「私の卒業論文——字余り歌について——」と題してご講演いただいた。山本先生のご専門は、中世文学。なかでも和歌や連歌を中心にご研究なさっている。ここではご講演の一部を紹介したい。

先生はまず、「字余り歌」の研究へとつながったきっかけについて、お話しくださいました。趣味の一つである読書のなかでも、中高生の頃から好きだったのは山頭火の俳句だという。山頭火の特徴は、定型の、

五七五ではない自由律俳句にある。俳句の定型からは外れるが、独特のリズムで、それが、彼の作品の内容とどこかで響き合っているという。そうした破調ならではの魅力に惹かれ、大学では、和歌の「字余り」について研究された。

和歌の「字余り」については、早くは、本居宣長が『字音仮字用格』(二七六)や、『玉あられ』(二七九)において法則を提言している。宣長は、字余りの句には、単独母音の「あ・い・う・お」を句中に含むという法則があり、その法則は『古今集』などの古い時代では守られているが、『千載集』・『新古今集』以降は、法則から外れた字余り歌が見られると指摘している。

宣長の法則に対して、先生はいくつかの疑問を持ち、調査を行ったという。まず、なぜ『千載集』・『新古今集』の頃から法則に外れた「字余り歌」が許容され、増えたのか。これには以下の方法で検討したという。単独母音の「あ・い・う・お」を句中に含むものを「第一種字余り」、それ以外の「あ・い・う・お」を含まずに字余りの句を構成するものを「第二種字余り」と名づけて分類し、八代集の総歌数に対する、第一種・第二種字余りの割合を算出し整理された。また、「字余り歌」は表現技法の一つとして見なされていたのか。これには、藤原為家『詠歌一体』(弘長頃)や、『愚問賢注』(二六三)などの歌論書に見られる「字余り」歌に関する記述に注目した。「字余り」を味わいとして認め、技巧としても意識していたと読み取れる内容が記されていた。定型とされる音数とは一音の違いであるが、枠から外れることでもたらす効果があるのである。その他、作者の立場や個性についても「字余り」を基点として考察されたという。

加えて、卒業論文に取り組み過程で抱いた疑問を進展させ、研究された大学院生時代のお話もしてくださいました。和歌が人前でどのように歌われてきたのか、歌われてきた「場」についても、和歌会作法書からアプローチされたとい

う。その一つ、『和歌秘伝開書』をWebex Meetingで画面を共有して見せてくださった。多くの未翻刻資料を読み解き、諸本調査も行ったという。大変な労力を要したことは想像に難くないが、先生が楽しみながら研究をされてきたことが画面越しでも伝わった。

ご講演を通して私たちは、テーマを自分で設定し、先行研究を熟読して疑問を持つこと、定説を再検討し、データに基づいて根拠を示しながら論じていくことを学んだ。読む力、書く力、伝える力、すべてが必要である。コロナ禍の今こそ、じっくり自身の課題と向き合い、力を蓄えたい。

第五十五号 目次
巻頭随筆 研究余滴 随想
日本文学会秋季大会
二〇二〇年度の日本文科
コロナ禍の日常
日本文学科留學生の動向
留學体験記
大学院に進学して
卒業生からのメッセージ
夏期集中講義
研究レポート
院生部会報告
今年度の學生の活躍
日本文学科関係書籍
日本文学科同窓会から
二〇二〇年度講義題目
研究室だより・編集後記

2421202019191615111010 9 6 6 5 4 3 2

二〇二〇年度の日文科

大屋多詠子



今年度は異例尽くしの年となりました。全世界がコロナ禍に隣り間に呑み込まれて、本学も一ヶ月遅れで、新年度を迎え、同時にオンライン授業が始まりました。今こそ皆すっきり馴染んでいますが、当初はwebexやzoomなどのテレビ会議システムを講義や演習に導入することに比べると夢にも思いませんでした。三月末には、まだ今年を無事に取り切れるか全く見通せず、五里霧中といった心地でしたが、学科、学部、全学で協力しあって、オンライン授業も試行錯誤しながら、何とか軌道に乗ったと感じています。学生の皆さんにとっては慣れ

ぬことばかりでとまどわれたでしょう。特に二年生の皆さんは、入学式もできず、キャンパスに入れないまま新生活が始まって、晴れて大学生になったはずが、さぞ落胆されたことと思います。私達も大変心苦しく辛かったのですが、夏以降、少しずつ入構規制が緩和されました。さらに後期は、演習の一部では、対面授業や、対面とオンライン併用のハイブリッド型の授業を、日本文学科でも取り入れることとなり、コロナウイルスの感染状況に予断は許されないながら、それでも緊張がほぐれてきた心地がしました。

一年生の皆さんには、前期終わりのwebexでの懇談会でご紹介したのですが、コロナ禍になって、私は一首の歌を思い出しました。現代歌人の永田紅さんという方の歌です。

人はみな馴れぬ齢を生きている
ユリカモメ飛ぶまるき曇天

永田紅第一歌集『日輪』
(2000年・砂子屋書房)

ちょうど20年前、2000年に刊行された歌集の冒頭の一詩だったはずですが。私はちょうど年女で、前途に不安を感じていた大学院生でした。当時、同じような境遇の同世代の女性が詠んだこの歌に大変共

感しました。すっかり忘れていたのですが、コロナ禍で外出もままならない状況でふいに思い出しました。

誰しも、齢をかさねても、常に新しい、何が起るかわからない時間を重ねていくわけです。その不安感が「曇天」、曇り空という言葉に表れていますが、それでもユリカモメが飛ぶ、まるい空、という言葉で、ユリカモメが輪を回して空を飛んでいるような景色が浮かびます。曇り空でも先が見えなくても、それでも前に進むのだ、という意志が感じられて、当時、まだ頑張れる、と思ったのです。この歌を思い返すと、同じ気持ちになります。

大変な一年でしたが、それでもこの状況下だからこそ、オンラインという方法も新しい可能性として使えるようになったのだと肯定的に捉えたいと願っています。

私は江戸時代の曲亭馬琴を中心に研究しています。後期のオンデマンドの講義で、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』を扱いましたが、その中で、里見義実という君主の「君子は時を得て楽み、時を失ふても亦楽む」(第三回)という言葉を紹介しました。合戦から敗走した義実が、太公望を例に、七十歳になる

まで世に知られることのなかった彼のように、失意の不遇の時であっても楽しまねば、と家臣に言う場面です。これについて、ある学生が「何かと行動が制限される時期であっても、今だからこそできることを探して実行していかねばならないと感じた」と感想を書いてくれました。とても心強く思いました。

馬琴は「禍福はあざなえる縄の如し」という言葉を好んで使います。禍と福は縄のようによりあわさっている、というわけです。コロナ禍がいつか福に転じるようにと願っています。キャンパスで皆さんに会える日を心待ちにしています。



コロナ禍の日常

「経験と財産」

四年 成澤穂のか

突然、世界から「当たり前」が消えた。自由に出歩けない、マスクは外せない、学校ははじまらな...。世界がこんな形になってしまっなんて、誰が想像したんだろうか。学校どころか日々の生活に

すらも大きな制限がかかり、一歩家から出るにしても神経をすり減らした。きっと日本中、世界中の人たちが同じように神経質になり、人と話すということに恐怖を覚えてしまっただろう。コロナなんてなくなればいい、なぜこんな風になってしまったのだろう、元の生活がしたい、「当たり前」を返して——こんなにも全世界の人たちが思っていることが共通している

ことは今後ないかもしれない。私自身も就職活動と時期が被り、大変な思いをした。私だけではない。受験生、新入生、部活動に励む人たち、いろいろな人がこの約1年本当につらい思いをしたと思う。

たしかにコロナのせいで私たちの生活は大きく変わってしまった。しかし、世界が歪んでしまったからこそ改めて見えたものがあることも確かである。人と関わることの大切さ、毎日美味しいご飯が食べられること、行きたいところに行かれること、家族・友達との存在の大きさなど、今まで「当たり前」なこととして私たちの生活にあったものが、「当たり前」がなくなっただけで途端にきらきらと輝いて見え、愛おしいものになっ

た。コロナがあつてよかつたとは思わないが、私はたくさんの「人間として大切なこと」を見落としていたのかもしれない、と思う。

「人生は経験したものの勝ちだ」と中学時代の恩師が言った。新しい生活様式が浸透し、すれ違う人が皆マスクをつけている、そんな世界で生きる経験も決して無駄ではないと私は思いたい。実際こんな状況だからこそ、大事なことに気づくことができた。SNSの普及によつて会わなくても繋がることができ、インターネット社会の発展が著しく進んでいる現代に、世界中を大きく揺るがす事件が起こったことは、何か意味があるのかもしれない。

「消費する日々」

三年 岡本 知帆

コロナが世界を蝕んで、実際に自分の生活に大きな影響が出たのは四月だった。四月、これまでだったらオリエンテーションや授業を組むのに大忙しだった。しかし、今年は四月になっても大学は始まらなかった。これは大変なことになった、と

その時初めて実感したのだった。

ここで実感するのは、遅いと思う人も多くいるだろう。何故、四月まで何も感じなかったかというところ、アルバイトに影響がなかったためだ。

私は、学習塾とカフェのアルバイトを掛け持ちしている。三月まで、どちらのバイト先も通常営業であった。四月から、塾はオンライン授業になった。また、カフェも短縮営業になった。消毒やマスクを着用することなどの多少の変化はあっても、ニュースで見えるようなバイトを解雇されたり、バイト先が閉店するなどはなかった。

五月に入り、大学のオンライン授業が始まった。これまで、授業時間割は友人と情報交換しながら組んでいた。しかし、今年は自分で教職科目を調べ、足りない単位数を計算し、授業を組んだ。これまで一番苦労したような気がした。しかし、他大学の一年生になった弟は、私以上に苦しんでいた。友達

達が誰一人としていない中、初めての時間割作りに頭を抱えていた。前期の授業は、とても大変だった。教職科目が前期に集中したこともあり、一日中パソコンの前に座っていた。一時間半講義を受け、

課題をやることがつらかった。六つ授業のあった木曜日は、教授には申し訳ないが、誰かが具合が悪くなる事を切に祈っていた。

コロナ禍で、もう一つ不満を挙げるとすれば、情報を自分で獲得しなくてはならない点である。就活も、去年のように大学に行っていたら、友人と情報交換し、今よりももっとちゃんと就活していただろう。現在、オンライン説明会、オンラインインターン、これまでスーツを着て行っていたものを自宅で受けられる。楽になったと思えうけれど、やはりこの時代の就活は情報と個人のやる気が大事だった。これからはもっと頑張らなくてはならないと思う。

コロナ禍の日常は、課題をこなすし、バイトに行き、気が向いたら就活をして、教習所に通う。やらなくてはいけないことをこなす、味気ない「消費する日々」である。大学三年生、大学に行つて、友達と御飯に行つて、くだらないけれど、楽しい日々を過ごせると思っていた。

「私の新生活」

二年 伊藤 諒

私の学生生活は、自肅期間によって大いなる変化があったといえるだろう。今日は生活環境と習慣の変化、そしてそれによる利点と難点、今後の不安や展望について記していく。

まず私の部屋の環境が自肅期間中に大きく変わった。パソコンの利用率の拡大やオンライン授業の増加でパソコンの設備拡張が必要だと感じたためである。青山学院大学から配布された給付金で私はサブモニターとウェブカメラとマイクを買った。これによってオンラインで顔を出すことが求められる授業に対応可能になった。そしてこれらの購入物で一番役に立ったのはサブモニターである。どうしても手狭になる一面でも、サブモニターに講義を映してメインモニターで板書のメモなどをすることで効率的に作業することが出来る。また、ウェブ授業で自室をカメラで映すことが多くなり、不必要な情報がかメラに映らないように部屋の模様替えなども行った。自肅期間中は運動不足になり

がちであるので、いい運動になった。

環境の変化とともに生活習慣が

変わっていった。私の生活習慣の

変化は睡眠時間にある。授業を受

ける日は起きてから荷物を整えて

電車に乗る必要がある。そのため

登校時間が友人たちの中でも比較

的短い私でも一時間程度は移動に

費やしていた。しかし、自肅期間で

オンラインになったことでその時

間はパソコンをつけてウェブペー

ジを開く時間に置き換わった。約

5分である。そのため睡眠時間が

普段の生活よりも多く取れるよう

になった。また、コマが空いてい

るときの時間つぶしもしやすくな

った。学校にいるときには街を

散策することやレポートを自習室

で消化することがあった。しかし

自分のパソコンが必要な作業や、

自分の部屋の片づけなどはできな

かった。それらのことがすべてで

きるようになるので自由度は格段

に上がった。これらが生活習慣の

変化の中で見つけた利点である。

しかし、その後には日ごと起き

る時間が不定期になるという弊害

が発生した。そのため適度な運動

や、午前中から何らかの予定を入

れておくなどのことをして生活習

慣を平常に保つことが必要だ。

最後に、今学生が抱えている不

安だが、それは交友関係であろう。

例えば、同じ学年の友達と話すこ

とはとても減ってしまった。もちろ

んLINEなどの各種SNSを使用す

ることで友達の近況を知ることが

出来る、しかし学内の交友関係は

それだけにとどまらない。学部でた

まに話す友人やあったら挨拶と世

間話をする程度の友人とはめっき

り顔を合わせず喋ることもなくな

ってしまった。一年生という短い

一年で積み重ねた交友関係がこの一

年のせいでリセットに近い状況で

始まるのではないだろうか。また、

日本文学科の日文委員を務めてい

るが、会合などをすることも難し

く思うような活動ができていない。

私たちはこの自肅によって目に

見えない人間関係を感じるリスクと

引き換えに失ってしまったのでは

ないだろうか。縁は就職でも成績

でも趣味でも人を大きく左右する。

この一年で失った関係を一度出

会った人とこれからの残り二年で

新しく作り出すのも、新しい生活

習慣というものなのかもしれない。

「能動態」

一年 魚津瑤矢人

こんな形で始まる大学生活は、見知ってきたどんなフィクションにも当てはまらないようなものです。「すごい状況に置かれているんだなあ」と俯瞰したり、ちょっとだけ、この生活を楽しよう、という気概になったりしました。おそらく僕はあまり気落ちしなかったほうのようです。新生活、始まりの時期。特殊な環境下ながら、わくわくはないこともなかった、という感じです。

夏休みはひとえに変な時間でした。人生でいちばん暇な夏休みでしたし、夏休みという括りをとっばらってもいちばん暇でした。僕は大変に怠けて、ただ淡々とご飯を食べて寝ていました。

自発的に動くこと、予定を立てることがいかに重要かを、僕はこの平坦な夏休みから思い知りました。教訓めいて、仰々しい節があります。ほんとうに思い知りた。何もしようと思わなければ、ほんとうに何も起こらないのがいまの状況だといえます。僕は今年度当初、何もなければいい！

と思えていました。が、だんだんと感覚を失っている感じが苦しくなっていて、ついには自分で予定を立てるに至りました。

高校のころまで、休み時間は自分の机からたいいてい動かず、本を読むか、寝るか、誰かが話しかけてくれれば話す、という感じだったのが、僕です。大好きなかつ丼も毎日食べてしまつては、いつしか飽きてしまつてしまいます。暇を味わいすぎた僕は、高校のころの友達に電話をしようと誘い、電話中にキャンプの予定を持ちかけてくれたことから、キャンプに行くまでになりました。つまりは、そういうことなのだと思います。

体感としても、おかしくなっていたことがあります。今年、僕個人は家にいることのほうがずっと多かったです。親の言いつけを守るように、外出自粛の要請に律儀に従い続けていました。送っていたのは、いわば肉体的な苦勞の一切ない生活です。不安、悩みの方向が妙なところに行つてしまつたみたいで、元々軽く持っていた潔癖症がひどく悪化しました。物に触れなかつたり、お風呂に何度も入つたり、など。

あえて忙しく、あえて外に出る、ということを重ねて、これを書いているいまはだいぶ回復しました。(世相的に正しい話ではないかもしれませんが、気が狂うほど家にいたのです)そういうわけで、日本文学科での対面授業もさまざまなリフレッシュになりました。むずかしい、慣れない生活に適應していく、というような時間だったと思います。おそらく、将来は二〇二〇年は面白かつたなあと思ひ返ることができると思っています。笑い話にできる日を待ち望んで、生きていくのみです。

日本文学科 留学生の動向

佐伯 眞一

二〇二〇年五月現在、文学部日本文学科在籍の私費留学生は全部で三七名、そのうち二〇二〇年度の入学者は九名です。今年の入学者は中国・韓国・香港出身、全員男子なのは珍しいことです。

また、大学院では、前期課程・

後期課程それぞれに二名ずつ、計四名の留学生在籍している他、国費留学生二名が科目等履修生として在籍、さらに博士論文執筆のために在籍している客員研究員が一名います。今後も国費留学生の受け入れを予定しているなど、留学生は増加し、さらに高度な研究者を含めて多様化しています。日本文学科の国際化は急速に進んでいるわけです。

学部の留学生には、上級生がチューターとして指導にあたることになっていきます。二〇二〇年度は、菅野由衣・長野亜海・松岡真結子・山崎茉緒の四名がチューターを務めています。

今年は突然のコロナ禍のため、大学全体がオンライン授業となつたので、母国に帰って受講している学生も少なくありません。オンライン授業では、学生がどこで受講しているのかすぐにはわからないため、日本国内にいるかと思つて話しているうちに「あ、君は今ソウル?」ということになったり、「中国の洪水のせいでレポート提出が遅れます」という連絡が来たりすることもあります。

例年、教員とチューターは、留

学生と共に、年に二回ほど文化交流活動を行っていますが、今年はそれもリアルに行うことができませんでした。そのため、前期授業が終わった後、八月十九日にはウェブ上で懇親会を行いました。また、一年次の留学生向けの授業「日本文化文学入門」では、後期には、日本にいる人たちだけでも集まろうと、キャンパスでの対面授業をオンラインで中継する、ハイブリッド授業を数回企画しています。一年生は、キャンパスの中で授業を受けるのは初めてだったりして、異例の年だと痛感しています。

なお、「日本文化文学入門」で使用している『留学生のための日本文学入門』は、青山学院大学教育改善支援制度の支援を受けて二〇一七年に刊行した独自テキストですが、残部が少なくなり、本年度中に改訂版の発行を目指しています。

コロナ禍がおさまったら、文化交流活動も再開したいと願っています。写真(次頁)は、二〇一九年秋に、日帰りで横浜に出かけた時のものです。こうした楽しい日々が、早く戻って来ますように!



留学体験記

伊藤 遙

私は、二〇一九年八月から二〇二〇年四月初旬まで、アメリカ合衆国ノースカロライナ州(東海岸南部)の大学に留学をしました。私が留学をした地域は山に囲まれていて自然がとても美しく、学生や教職員、地元の方々も温かい方ばかりでした。日本に関心を持っているアメリカ人の学生も多く、多くの人と様々な形で関わることでできる環境であったと思います。

私の留学の目標は「自分が学ぶだけでなく、自分からも何かを発信できる留学にすること」でした。その目標を叶えるため、現地の大学で開講されていた日本語の授業に先生のアシスタントとして参加させて頂きました。当初は日本語や日本文化に関する受講生からの質問に英語で回答することが困難でしたが、日本文学科で学んできた知識を少しでも活かしたいという思いで少しずつ語彙を増やし、徐々に上手く回答できるようになりました。アシスタントをする内に受講生の中に友人もでき、テスト前に「勉強会をしたいから一緒に参加してくれないか」と声をかけてもらった時は本当に嬉しかったです。

また、日本人の学生とアメリカ人の学生を繋ぐコミュニティに参加して日本の伝統的な行事についてプレゼンテーションを行ったり、各国の文化を紹介するCuline Crawlという大学のイベントに出演するなど、授業時間外でも貴重な経験をたくさんさせて頂きました。特にCuline Crawlではアメリカ人の友人と一緒に多くの人の前で日本のアニメソングを披露し、日本の漫画やアニメといったサブカルチャーが世界でも広



く受け入れられているという実感を改めて得ることが出来ました。

私はリーディング課題の多い文学系の授業を中心に履修しており、学業と課外活動の両立はとても大変でした。しかし、多様なバックグラウンドを持つ方々と出会うことでここには書ききれないほど多くの経験をし、自分の視野を大きく広げることが出来ました。新型コロナウイルスの影響で帰国時期が早まってしまったのは非常に残念でしたが、長期間アメリカに留学できたことは私にとって大きな財産となりました。この経験から学んだことを今後の人生にも活かしていきたいです。



大学院に進学して

博士前期課程一年 西澤 駿介

晴れて青学へと進学したのは、思えばもう既に半年以上前のことであった。それは、時間が意思を持つたと思えるほどに、時の流れははやく、時間を感じ取ることはとても容易なことではなかったと思う。それもそのはずで、今年はコロナウイルスのためにオンラインによる授業だったからである。実際授業開講当初は、大学にも入ることができず、図書館や日文研な

どの資料を十分に散見することができないために「JapanKnowledgeや日本文学Web図書館などのオンライン上で利用できる資料をもとに授業や研究は進んでいった。初めは、オンライン上での資料を閲覧する際の機能や長時間のパソコン利用による目の疲れなど、当時の状況の気分と相俟って、体が気持ちに追い付いていないこともしばしばであった。しだいにオンライン授業に幾分慣れてきたものの、常にパソコンと向き合っ

ひとり黙々と研究を進めるといふ孤独な身振りに、心を波立たせることなく過ごすには、多くの時間を必要とした。だが、しかしである。研究というのは、本来的に孤独なものである。もちろん、今回のそれは、極限的な形であることは言うまでもないが、この孤独といかに向き合えるかが、大学院をして研究においては、必要になってくるのではないだろうか。

ただ、私の中にある、もうひとつの大学院での記憶を思い起こすならば、それは決して孤独なものだけではなかった。学部生でありながらも参加した大学院の授業は、三、四人、時には五、六人の先生に囲まれながらのものであった。自らのレジュメに対して、厳しくも有難い

指摘に冷や汗をかいていた記憶というよりも、ここでの記憶は、議論が深まるにつれて、授業の時間を過ぎてもお、議論の熱が冷めやらぬ記憶であり、その熱気に全身が包まれていた記憶である。それはいわば知が一気に結晶化していく現場に立ち会った記憶でもあった。

研究とは、なるほど、自らの研究対象とじっくりと向き合う孤独なものかもしれない。それは、いま人の気配を感じることもなく、ただひたすらにひとりでいる時間が多からであろう。しかし、だからこそ、人の息づかいが感じ取れるあの空間を懐かしく思うのである。このある種特殊な孤独の状態で、ただ過去に触れることのみが、いま私の心を和らげるのである。

卒業生からの メッセージ

「どうせ行くならマシな地獄へ」

二〇一九年度卒 安田かおり

私が自分が世に言う『就活生』

であることを思い出したのは、犬も凍えるような2月28日でした。

大学二年ではありません。大学三年の冬です。マイナビやリクナビが、ボジョレー・ヌーボーでも始まるかのように「明日解禁！解禁！」と騒ぎだして初めて、私は自分が就活生という身分であることを思い出したのです。

インターンのイの字も体験していない私がやったことは、「エントリーしまくること」「説明会に行きまくること」の二つです。もつとスマートなやり方があるに違いないのですが、冬まで就活から目を背けてきた私には、もうこれしかなかったわけです。

幸運にも私は興味のある分野と、ない分野がはっきりしてしまいました。また、これだけは譲れないこだわりのようなものがあつたため、手当たり次第どこでもというわけではなかったはずなのですが、結局70社近くもエントリーし、40社以上の説明会を聞きました。

それでも一社しか受からなかったわけですから、もうここでの体験記に見限りをつけてもいいと思います。一部の好事家のためもう少し続けます。

興味のある分野というのは出版でした。これは一切の望みを捨てよと言わんばかりの狭き門で、あつさりすべて落ちました。

実は私は6月には教育実習を控えていたため、出版に絞るのは難しいと判断し、もう一つの譲れない条件を中心に据えることとしました。

これが何かというと、私服勤務です。バカバカしいと思われるかもしれませんが、大嫌いなスーツでは3ヶ月と持たないと思つたのです。今私はパーカーにスニーカーで出社できる環境にいます。が、こういったこだわりは意外に重要なのではないかと思います。私服勤務の企業を中心に就活をシフトした結果、私はITの広告会社に行き着くこととなりました。

就職活動にはいつか終わりが来ます。最中はすごく辛いけれど、ほとんどの場合終わりがくるのです。ですが、社会人生活というのは、これがなかなか終わらないのです。仕事はなんでも辛いです。

だからせめて私は好きな格好で働いています。背中に「東京」とプリントされたパーカーや、真っ赤なエアマックスです。

こんな体験記を最後まで読んでい

いただいた皆さんの内定のその先に、せめてもの救いがあることを願います。

「向いていないと」

言われた仕事に就いて」

二〇一九年度卒 三鶯 呼夏

初めて先生になりたいと思ったのは、小学校二年生の頃だったと思います。当時の担任の先生にリトルティチャーと言われたのが嬉しく、単純な私は先生を目指すようになりました。高校生になり、古典文学の世界の美しさに惹かれ、高校で古典を教えたいという明確な目標ができました。

人生の重要な選択の中で、私は必ず先生という職に就く道を選んでいました。高校で学ぶ教科も、受ける大学の学部学科も、大学で履修する講義も、すべて先生になるための選択をしていました。ただ、周りの友人たちからは、「先生には向いていない」と言われることが多かったです。人前で話すことや、周りから特別に注目されるのが苦手だった私を見て、人を導く先生という仕事は、厳しいので

はないかと思っていたようです。

また、人間関係において波風を立てるのを避けるため、基本的に受け身の、人の意見に合わせる生活をしていました。そのため、周りからは余計に心配されました。

大学三年生になってからは、本格的に教員になるための勉強を始めました。そこで感じたのは、周りの友人たちとの大きな差です。普段からリーダーシップを発揮していたり、人前でも臆することのない度胸を持っていたり、自分を曲げない強い信念を持っていたり、友人たちと私の間にある壁にシヨックを受けました。このままではきつと受からない、万が一受かったとしても、向いていない職業に就いてしまったらそれこそ本

当に苦しいのではないかと考えるようになりました。しかし、自分の夢をどうしても諦められなかった私は、最後までがき苦しみながら、試験を受けました。

結果は合格でした。私は現在、神奈川県公立高校で先生として働いています。人前で話すことが苦手だったと書きましたが、そんなことを言っている場合ではないのです。毎日毎日、教材研究や部活動、

校務分掌に追われ、そんなことを考えている間もないのです。気づいたら、40人の生徒たちの前で下らない雑談をして、ウケを取ろうとするようにまでなってしまういました。(たい

ていは滑ります。)向いている、向いていないというのは、あまり関係がないように思います。自分には適性がないから、他の人よりも向いていないからという理由で、諦めてしまうことは、もったいないように思います。向いているとかそういうことよりも、なりたい気持ちを大切にしたいです。先生になることを、諦めなくてよかったです！

「就職活動体験記(一般企業)」

二〇一九年度卒 森野 洸市

私は現在、大手メーカーのグループ会社の一社員として働いています。俗に言うサラリーマンです。

小さい頃は、「宇宙飛行士になりたい!」「プロ野球選手になりたい!」など、無邪気に大きな夢を描いていた人が大半だと思えます。しかし年を重ねていくごとに、将来の夢というものは現実的なもの

に切り替わってしまうものです。

かく言う私も、「将来は良い大学に入って自分の好きな勉強をして、どこか良い企業に入れたら」という、将来の夢というよりもぼんやりとした目標になっていました。そのため就職活動を始める直前は、本当にどんな仕事をしたいかというのが定まりませんでした。とても悩んだものです。

そんな私がまず行ったのが「自己分析」です。就職活動は「自己分析で始まり、自己分析で終わる」と言っても過言ではありません。まず自分がこれまでやってきたこと、自分の性格、長所・短所などと、自分を見つめ直します。そうすることで「自分はこんな仕事が好きそうだ」とか、「興味は無かったが自分にはこんな仕事に向いていそうだ」というものが見えてきます。そして自分の「就活の軸」を定めて、企業を探していきます。

因みに、私の就活の軸は「人」です。私は昔から人に喜ばれることをするのが好きでした。相手のことを考え相手に寄り添い、相手を笑顔にするということをもっとに生きてきました。そのため、人に寄り添って誰かの為になる仕

事、人を大切にしている企業を探しました。初めは百貨店や紳士服業界など、お客様と密に関わるBtoCの仕事を中心に見ていました。しかし最終的に選んだのは、BtoBのメーカーの営業職でした。

なぜ現在の営業職の仕事を選んだかというのは、ただ商品売るだけの営業ではなく、お客様の抱えている問題の解決策と一緒に考えて解決する「ソリューション型営業」を行っている会社だったからです。相手に寄り添う営業というのが私の心に響きました。そしてこの営業スタイルは、日本文学科の「演習」の授業と似ています。演習では、作品に対して「自分なりの根拠と仮説を立て、相手を納得させる研究と発表をする」ことが大切でした。「自分なりの根拠と仮説を立てる」という力は、「お客様の潜在ニーズを見つけて解決策を出すこと」に繋がります。「相手を納得させる研究と発表をする」というのは、「お客様に納得してもらおう提案をする」とことほとんど同じです。よって、日本文学科で学んだ演習での経験が非常に活かせると考えました。

また、説明会で福利厚生の手厚さや社員さんの温かさを感じ、こ

の会社は本当に「人」を大切にしているのだと思います、ここで働きたいと考えました。

そして今、実際に多くのお客様に寄り添った商談などを行い、とてもやりがいを感じて働いています。就職活動前の私のように、将来何をしたいか分からず悩んでいる人は少なからずいると思います。しかしそれが駄目だということはありませぬ。寧ろ将来何をしたいか分からないというのは、将来何も出来ない可能性がある秘めているということだと思います。改めて一度自分の人生を振り返って、これからの自分の未来に向けて突き進んで下さい。新型コロナウイルスの影響など様々な不安はあると思いますが、青学の日本文学科で多くの学びを得た皆さんなら大丈夫です。後輩の皆さんがどうか悔いの無い道を進んで行けるよう願っております。

「出版アレコレ」

二〇一八年度卒 岡 稔実

急に片山先生に頼まれて書いています。株式会社KADOKAWA

の岡です。大学生のときは片山先生のゼミで、坂口安吾を研究していました。まだまだ困惑しておりますが、就活だったり、今のお仕事だったりのお話をしたいと思います。なんとか在校生のみなさまのお役に立てればと存じます。ではまずは、就活のお話です。なんだかんだもう二年以上前になるので、今の様式とは変わっているかもしれませんが、参考程度にふうんと思ってくださいね。

私は中学生ぐらいのときから本が大好きで、とにかく出版社ばかり就活では受けていました。そこそ大手から小さな出版社まで幅広く受けました。私が出版社を受けた中でもっと対策しておけばよかったなと思ったのは、筆記試験の対策です。特に大手だとジャンルが広くて、就活が本格スタートしてから友人と対策をしました。他の企業のエントリーシートなどを書いている合間に勉強しているだけでは中々追いつきませんでした。その会社の書籍のタイトルを記入するものから、難読漢字、美術、流行りのお笑い芸人など、とにかく思っているより幅広いです。ぜひまだ時間のあるみなさんには、出版社の

筆記試験対策本などもあるので、早めのチェックがおすすめです。

面接に進んだあとに苦労したことは「どれだけ印象が残るか」ということでした。本への情熱は誰にも負けない自信がりましたが、短い面接の中ではそれをいかに面白く簡潔に伝えられるかが重要です。特に一次面接で多いグループ面接では、自分ひとりの発言できる時間が本当に僅かです。はじめはその形式に慣れることができず、バタバタと一次でのお祈りメールを何通も受けました。そこで自分に足りないものは何かと考えたと、インパクトのある簡潔明瞭な面白さ（興味深さ）だと思ったのです。それ以降の面接は、自分は今『IPPOZグランプリ』にでているんだと思込ませて取り組みました。私にはこれがかなり効果があり、KADOKAWAの最終面接の際も、得意の麻雀ネタで笑いをとることができました。ほんまかいな、と出版社を目指していて気になる人はぜひ私のアドレスにメールを送ってください。〇〇登録をしているのできつと就活支援センターにあるはず。ぜひお気軽にどうぞ。そして現在のお仕事の話にうつ

ります。今は、営業局内の書店でのフェア企画や営業マンの受注サポートなどを主に行っておりません。私自身が実際に営業に行くわけではないので、基本今は在宅で、ときどきオフィスで働いている形です。オフィス内もお洒落で、複合施設も先日オープンしたばかりですがかなり充実しています。ぜひ遊びにきていただきたいです。

編集者を目指して私は出版社を受けていましたが、はじめは営業で一から業界のことを知りたいと思っていました。特にKADOKAWAの出版営業スタイルは、昔ながらの考え方の多い業界の中でも、最先端を行く異端児でもあり風雲児でもあると思っています。斜陽と言われる出版業界ですが、東所沢施設にもデジタル印刷機を導入し、出版社自前で小ロットでの印刷、製本・配送までを行う予定です。この取り組みに着手したのも、販売委託制度が本には適用される中で、売れずに返品される書籍が非常に多いということです。返品率を下げることであれば、その分書店などに還元できる利益を増やすことができるのです。まだまだ私もこの世界に足を踏

み入れたばかりですが、本好きのみなさん、ぜひどうすればネットの発達した世の中で本が生き残っていくのか、どんな形態に変化していくのか、一緒に考えていきましょう。

「三度目の入社」

二〇一八年度卒 鮫島 桜子

私が新社会人として今の会社に入社してから約一年半、他の人とは少し変わった経験をしてきた。正確には卒業式を目前に控えた四年の三月中旬まで話はさかのぼる。ある日突然上司に呼び出され入社後配属予定だった事業が他の会社を買収されることを告げられた。自分なりに将来のビジョンを考え抜いた末に入社を決めた会社から別の所へ行くことになり、めでたいはずの門出に急に雲がかかった。しかし本当に悩み始めたのは入社して働き始めた後からだった。もともとベンチャー企業の営業職として、若いうちからバリバリ働き経験を積みたいと考えていた私は、まさか自分が事務職に配属されるとは思ってもみなかった。同じ夢を抱いていた同期やそれまで教

育をしてきていた先輩たちとはみなバラバラになった。幸いにも配属先の先輩や上司はとてもいい人たちで仕事自体はさほどきついものではなかった。ところが忙しい毎日にも慣れてくると「本当にこのままでいいの」と自問自答し始めることが増えていった。転職するにも早期退職やスキルがないのではリスクが大きすぎると思い、ひとまず一年は踏ん張ってみようと思った。その後新型コロナウィルスにより在宅時間が増えたタイミングで少しずつ転職活動に向けて準備をしていった。実際に転職活動を始めると、ここ数年続いていたいわゆる売り手市場から買い手市場へと一気に就職市場が変化したこともあり苦戦を強いられた。未経験の営業職には書類通過することすら困難で、面接にこぎつけたのは現職と同じ保険会社や金融業などむしろコロナ渦でも需要が微増している業界がほとんどだった。接触を避けるために選考をなるべく一回に凝縮し、平日のど真ん中にもかかわらず夜遅くまで面接や試験が続いた。最終的には希望する企業から内定を得ることができ、現在は退職に向けて引継ぎに追われている。この先さらに景気は悪くなり就

職活動は厳しくなると言われているが、若く柔軟な人材を求めている企業は確実に存在する。実際に私の周りでもコロナによる業績悪化で退職せざるを得なかった人もいたが、先にも述べたように急激に世の中のニーズが高まっている業界があることも確かだ。これから就職活動を迎える学生の皆さんは、前代未聞の状況下で戦わなければならぬ不安を抱いている人が多いかと思う。しかし、世の中の動きと自分の進みたい道を見極め、マッチングすることにも目を向けられたらそう悲観視する必要はないだろう。自分の意思に反して一度は働く先を変えられた私がそうだったように、大事なものは自分が歩みたい将来を決して諦めることなく進み続けることではないかと思う。

「一読三嘆」

二〇一九年度卒 秋山 卓澄

薄く濃き野辺の緑の若草に
跡まで見ゆる雪のむら消え
野辺の草の濃淡を見て、雪が溶けていく様子を連想した歌であるが、

この歌は私の人生を変えた歌である。古典の成績が赤点かそうでないかの瀬戸際を行ったり来たりしていた高校時代、この歌に出会い、先人の想像力の豊かさに感銘を受けた。とりあえず大学に行き、将来は音楽の道にでも進もうかと考えていた私に、大学では日本文学を学び、将来は中高の国語の教員になると強く思わせるほどのエネルギーが、この歌にはあった。

その2年後、青山学院大学文学部日本文学科に進学し、3、4年の頃は高田先生のもとで『古今和歌集』の勉強に精を出していた。現在は、都内私立中高一貫校にて国語を担当している。

現代文であれ古典であれ、えてして国語は、かつての私のようにそこに学ぶ意義を見いだせない生徒を生み出しやすい教科である。「日本語なんだから読める」とか「古典を学んで何の役に立つのか」とか、理不尽な評価をされやすい。この機会に、学校教育における国語の存在意義を示しておきたい。

私たち一人一人は、私たち一人一人ではない。「私」は「私」であり、「あなた」は「あなた」でしかなく、当然一つの人生しか生きることでは

きない。そんな個人が寄り添いあい、社会生活を営むためには、この世界にはどんな人たちがいるのか、自分以外の人たちがどんなことを考えているのか、などを知る必要がある。そのために手っ取り早い方法は、自分ではない人が描かれたものや、誰かの考えが書かれた物を読むことだ。そうすることで、一つの人生しか生きられないはずの私たちが、他人の人生や思考を疑似体験できる。要するに文を読むというのは、自分の中にもいものを取り入れ、自分という枠組みを広げる行為だと言える。そういう機会を得るのが国語の授業なのではないかと思う。

私が授業を通して生徒にしつこく「自分のこととして考えなさい」というのはそのためだ。生徒たちが目の前の文章から一歩踏み込み、目に見えない自分の内面や、自分が関わり合う人たちの心などに想像を働かせることのできる人になってくれることを、日々強く願っている。

このように学校で国語を担当するかたわら、私は韓国語関係の執筆や講義もしている。2020年4月には、HANAという出版社から『やさしい基礎韓国語』という、入門者向けの参考書を出版し

た。1日4ページというハードルの低さにもかかわらず基礎がしっかりとし身につく構成となっているので、興味のある方は書店などでぜひ手に取っていただきたい。

漢字文化圏であること、助詞を持つことなど、日本語と韓国語には共通点が多々あるが、学べば学ばほど日本語と韓国語の違いが浮き彫りになり、実に興味深い。たとえば日本語の「混ぜる」にあたる動詞は、韓国語では미치다(ビダ)や젓다(ジョッタ)などで使い分ける。ビダは「ビビンバ」の語源であるが、「こすり合わせて混ぜる」というニュアンスを持つ。

一方ジョッタは、液体をかき混ぜるときに使われる。カレーやかき氷なども最初に混ぜてから食べるほど「混ぜる」文化が根付く韓国だからこそ、「混ぜる」を表す動詞が細分化したのではないかと個人的に考えている。このような動詞の例以外にも、名詞や形容詞、助詞、はたまた敬語体系にまで日本語との違いを観察することができる。

外国語を学ぶことで、その言語圏ではなにに価値を置いているのかが見えてくる。またその一方で、日本語を使う我々がどのような思

考をしているのかも、同時に内省することができる。韓国語にかかわらず外国語に触れる方には、外国語を通してその言語圏の人たちの思考、また日本語ネイティブの思考にまで思いを巡らせていただきたいと考えている。

このように国語や韓国語に向き合う自分の態度を振り返ってみると、「薄く濃き野辺の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え」が頭によぎる。見えるものの奥に隠れた、見えないものを推し量ることの大切さを、私はこの歌から学んだように思う。この歌人に対する敬服の念は、ますます深まるばかりである。

夏期集中講義報告 (日本文学特講A)

「コロナ禍で再認識するジェンダー」

三年 佐藤 杏

日常的にマスクをすることが当たり前になり、ニュース速報で表

示される感染者数がなんの感染者なのか明記されなくなったころ、私が受講したのは「日本文学特講A」というジェンダーを扱う授業でした。この授業を受講しようとしたのは、コロナ禍が続くとは到底思ってもいなかった頃。普通に直接学校へ行って、顔を合わせて授業を受けることが当たり前でした。しかし、結果的にコロナ禍が続き、ニューノーマルな私たちの授業になったことで、授業に新たな意味が生まれたと感じました。

まず、コロナ禍だからこそ、性を改めて再認識できると考えました。例えば、妊娠については。コロナ禍において人との関係が遮断され、1人の時間が増えざるを得なくなりました。実際、私は大学へ行くことがなくなり、友人と会う時間も少なくなりました。今はSNSが発達しているため、連絡を取ることはできますが、直接会えない状況や連日の報道からふと、社会から断絶されてしまったような錯覚に陥ることさえありました。妊娠・出産時と同じ状況が生まれるのではないのでしょうか。パートナーの助けがなければ自由に外出することも友人と遊びに行くことも難しく

なります。これに反して増大しているのは、母になったことで生まれる責任感です。物理的にも精神的にも自由になれない状況は女性の孤立化を際立たせます。妊婦の孤独は表立たないものの、コロナ禍による孤独は大きく取り上げられました。「母は強し」という都合の良い解釈を押し付けてしまうのではなく、孤独に寄り添うことが必要とされるのではないのでしょうか。

さて、現在、性は多様化しているといわれます。しかし、本当にそうなののでしょうか。今でこそLGBTQと名前がつけられ区別されていますが、これらの性的指向は昔から存在していました。明治期には女性による文学は少なく、評価は低かったですが、清水紫琴など確かに書き手は存在していました。つまり、どちらにせよ存在が隠されていたものが、時が経つにつれて表出したと考えられます。また、コロナをきっかけにリモートワークや日々消毒することが当たり前となりました。これにより分かったことは、昔の日常に縛られていたということ。毎朝満員電車で揺られるのが日常でしたが、これがなくとも一部の業務を除き業務

が成り立つことが明らかになりました。また、コロナ対策を行うことで結果的にインフルエンザの感染者が大幅に減少し、今までも行えた対策を行っていなかったために毎年蔓延していたのだとわかりました。こうしてわかるのは、今まで「それが普通」といって、思考を停止し、しかるべき改善を行っていなかったことです。「普通」は常に変わりま

す。10年前の普通はきつと今の普通とは異なります。都合の悪いことに蓋をして思考停止してしまうのではなく、常に「普通」に疑問を抱いていきたいと思いました。コロナ禍の授業はとても奇妙でした。本来ならば、直接会って顔を突き合わせ、お互いを認識した状態で授業を行います。しかし、コロナ禍においてそれは叶いません。直接会って、顔を見て、一緒に授業を受けたかったという思いはありますが、受講生が同じ時間にパソコンに向かい、同じ話を聞き、同じトピックについて議論を行っているという状況を思うとどこか直接会っているよりもつながりを感じるように思う部分もありました。特に今回報った性は現在センチティブな問題とされることが多いです。もしか

したら直接顔を合わせるよりも、顔が見えないままの方が普段ならば言いにくい本音の部分まで聞けているような気がして、コロナ禍の授業もマイナス面だけではないものだな、と感じました。やはりリモートだから劣る、と安直に決めつけるのではなく、必要なのは思考のアップデートだといえます。

研究レポート

修士論文中間報告会

中間報告会印象記

博士後期課程一年 天野 早紀

COVID-19感染症拡大の情勢の中、前期中は全授業オンライン形式となり慌ただしく始まった本年度、修士論文中間報告会もインフルエンザ形を採った。本報告会は例年教室で対面して行われているが、二〇二〇年九月二日（水）、日本語学四名、近代文学一名、比較文学二名の計七名の発表を、webex上にて行うこととなった。

開催準備時には、接続の不具合があった場合のプログラム繰り上げの可能性等、オンライン形式特有の懸念も多かった。しかし会を無事に終えた今、それと同様に、否、それ以上に、利点もまた非常に多かったといえる。

一つには、スムーズな報告会運営が可能となった点が挙げられる。何が起き得るのか・そのためにどのような準備を行うのかを、発表者参加者問わず平常時以上に念入りに確認、また共有できたことで、不測の事態により時間が前後することもほとんどなかった。改めて感謝申し上げたい。

また一つには、そのような限られた時間の中でも、対面時とも遜色のない実に密度の濃い議論が行われた点が挙げられる。機能上、挙手状況も総合司会からしか見えないう仕様であったが、分野を越えて多くの質疑が集まり、話題は尽きなかった。そこにはチャット機能も一役買い、時間内に収まらなかつた情報も、後々振り返ることのできる形で共有された点も印象深かった。音声情報と文字情報とが絶妙なバランスで機能していたと思う。

さらに一つには、学部生の聴講

希望者が対面時よりも多く集まったことが挙げられる。学部生にとってはゼミや卒業論文への足掛かりとして、発表者にとっては未来の研究仲間との交流の機会として、縦の繋がりを築けたことは、非常に大きな成果であったといえるであろう。

オンライン学会という形式は、学内外で既に多くの実践例が見られ、対面形式と並んで主流となっていくであろう。従来からの確実な研究方法と、新たな時代の研究方法との対話はいつ何時も行われる。それもまた自身の研究活動・成果をより一層盤石なものとするための糧となることを、大学院生一同、心に留めていきたい。

中間報告要旨

日本語表現における ポライトネスの諸相

佐々木啓丞（語学）

地域におけるオノマトペの使用状況、言葉の直接性・間接性という大きな二つの観点から、ブラウ

ン&レヴィンソンが提唱したポライトネス理論であるポジティブポライトネス、ネガティブポライトネスをもとに各地域におけるポライトネスの在り方を考察する。

ポライトネスの細分化を行うにあたり、まずオノマトペの地域差について論じる。オノマトペの使用がもたらす効果として、多くの先行研究において話の現場性を高める、話し手の意図をより鮮明にするといったものが挙げられる。ことから、オノマトペが持つ現場性等の働きがポジティブポライトネスと関わりがあると考え、オノマトペの使用とポライトネスの関係性に言及し、日本国内における各地域、特に関西・東北地方において、オノマトペの使用頻度を筑波ウエブコーパス、各都道府県における議会議録などを用いて調査する。

次に、言葉の直接性・間接性という点を小林・澤村(2014)の中で言及されている日常、非日常における地域的な会話における「型」の在り方をもとに、決まった言葉の言い回し、話し相手への気遣いの度合いといったものの地域的差異を調査する。そして、その結果をもとに会話が他の地域と比べ直接的であ

る地域と間接的である地域において、会話を構築する際に質・量などといったものの中から何に重点を置いていくのかを明らかにする。

その後、上述した二つの大きな柱をもとに、ブラウン&レヴィンソンのポライトネス理論をもとにして、日本国内においては地域ごとに会話を構築する際に何に重点を置いているのかということを加味した上でポジティブポライトネス、ネガティブポライトネスといった2つのポライトネスの地域的な出現頻度を分析・考察する。

推理小説の成立と

鑑賞における語用論

—「九マイルは遠すぎる」を例に

重久 理奈（語学）

原田(1996: 167-168)によると、語りに従い話が提示されることから、物語には説得という側面があり、推理小説（原文では探偵小説）も同様だという。さらに推理小説の場合は、一般に欠落していると思われる情報を関心事として、対応する

総合的な見解の成立を鑑賞上の争点とする(原田1996: 172-176参照)。これは主要な筋立ての解釈に関し、表だって共通認識の形成を図るに等しい。文学テクストの介する言語使用を問う文学語用論や語用論的文体論の見地からは、言葉選びに反映されていると思しき作者の意図が、読者に解釈され評価に至る相互行為と見なせるだろう。

しかし、フィクションないし多くの文学テクストの生産と受容は、日常における意志疎通や社交と異なり、虚構世界の住人をも伴う複雑な参画体系を有する情報伝達として成り立っている(Black 2006: 51-62; Jucker and Locher 2017; Leech and Short 1981: 257-287 [寛(監修) 2003: 166-199] 参照)。例えば原田が物語の持つ説得性の例証に挙げる、ハリー・ケメルマン(Harry Kemelman 1908-1996)の短篇「九マイルは遠すやむ」(“The Nine Mile Walk”)では、登場人物である探偵役の推論を通じて語り手を兼ねる「わたし」が、また彼らのやりとりを介して読者も説得されていることになる(原田1996: 167-168参照)。加えて作中では、発話から引き出せる推論が妥

当に思われても必ずしも実態に添わないことが取り沙汰され、その実証こそ失敗に終わるのだが、当初思いつきと称されていた発話は「わたし」が意図せず聞いていたものと判明する。同作は大半が登場人物二人の会話から成り、謎の起因と解明の一端を言語知識に負う一方、虚構世界内外で入り組んだ伝達形式を擁しているのである。

以上を踏まえ、本稿では特定作品を成立させる文体を考察するが、その特異性だけでなく典型性に着目することで、様式の及ぼす解釈・評価への影響にも言及する。なお同様の言語現象を招くにしても、語法に関して差異が見られる可能性があるため、原文と日本語訳と適宜並置してテクスト分析を行う。

日本語における 比喩理解と生成

——比喩の慣用化を伴う効果——

山田 力(語学)

現代日本語における比喩は、その形式、使用目的などが様々であ

り、先行研究もその手法は多岐にわたる。本稿の目的は、実践的な検証に根差した分類によって、それらの比喩表現の使用実態を明らかにするところにある。

比喩表現の諸相として、慣用化と呼ばれる現象と、使用目的による形式の差という2つの概念を並置し、比喩理解の度合いや表現そのものの性質の差に階層性(グラデーション)が存在することを考察する。この2つの概念が、比喩表現の使用に対する「効果」をいかにして産出するかという思考法により、その含意を類推するための「コスト(労力)」を尺度として位置付けを決定する。

比喩の慣用化には、サール(1985)らによる死喩や慣用的メタファー(イデオム)の主張を基盤とする。その上で、実例や心理実験(平・楠見(2009)など)の結果をもとに認知言語的な意味の類推の程度性を示す。また使用目的の差については、テクニク差や年代差による分析を行い、対象の比喩表現が聞き手・読み手に対してどれほどの「効果」を期待するものであるかを、客観的に実証する。客観性については、実例の喩辞―被喩辞間の共起頻度

を算出し、その数値を各比喩表現の新奇性(慣用性)の物差しとすることで保証したいと考える。

終章では、比喩の新奇性とその「効果」、さらにそこにかかる「コスト」には相関があるということを確認し、結論づける。目新しい表現ほど意味の類推による詩的推察の余地を聞き手・読み手に与えることができ、また新奇性のある比喩は、聞き手・読み手がそれと理解するためにかかる「コスト」を求めらなければならない。比喩における別々の性質は、理解者の視座に立つことにより、つながりをもった関数的な動き方をするということができるだろう。

大正・昭和タゴール翻訳史 ——「文学者」の受容を中心に——

新田 杏奈(比較)

本論で取り扱う、ラビンドラナート・タゴール(Rabindranath Tagore 一八六一―一九四一)は、近代インド史に燦然と輝く芸術の巨星である。タゴールは詩人でありながら、優れた戯曲作家、小説家、音楽家、画家でもあった。

また、精力的な社会活動家、教育者としても知られる。タゴールの最も有名な業績と言えば、大正二年（一九一三）のノーベル文学賞受賞が挙げられる。日本には前後、五度の来日があった。

日本における本格的なタゴール研究は戦後に始まる。インド学研究所の分野から、我妻和男、森本達雄両氏が中心となった。近年では、地域研究の分野から中島岳志氏、ベンガル文学の分野から丹羽京子氏等の研究がある。しかし今日、日本の文学者の受容に関する立ち入った研究は、殆ど皆無と言えらる。従って本修士論文では、タゴール作品の「日本人翻訳者」の系譜に光を当てて、その意義を明らかにしたいと考える。

本発表では、特に各章の大まかな筋立てと、内容の説明を行った。本論では、第一章から第三章を（前篇大正期）、第四章から第六章を（後篇昭和期）として構成する予定である。前篇第一章では、主に日本で集中的にタゴールの作品が紹介された大正四年（一九一五）前後を対象に、最初期の移入過程を整理し、「なぜ大正初期という時代においてタゴールが受容されたのか」という問題を

考える。第二章では、日本で最も早くタゴール作品を紹介した英文学者詩人の増野三良を論じ、第三章では、「六合雜誌」の編集委員を務める傍ら、タゴール研究に取り組んだ作家の吉田絃二郎を取り上げる。

後篇以下は、未執筆の箇所を含むが、第四章では、「戦時下の日本でタゴール作品がどのように遠ざけられたのか」という問題を考える。更に、第五章では、文芸評論家で詩人の山室静に焦点を当て、第六章では独仏文学者で詩人の片山敏彦の詩作とタゴールの受容関係について言及したいと考えている。

院生部会報告

二〇二〇年度日文院生部会代表
博士後期課程一年 天野 早紀

印象記として記した修士論文中間報告会は勿論のことながら、院生部会全体としても、本年度は新たな試みの多い運営体制となった。

まず新年度に行われる院生総会は、本年度は六月、オンライン上での合議の形式を採った。大きな取り組みとしては、組織と役職任

期の変更が行われた。庶務を廃止し組織図をよりコンパクトにし、また部会代表の年度始まりを十月とすることで、内外進学者問わず入学から半年間かけてより綿密に職務内容の把握を行うこととした。一層スムーズな部会運営が可能となっていくであろう。

九月には、やはりオンライン上で院生部会の臨時総会を開催し、新役員決めと引継ぎを行った。それというのも、年度当初の混乱の中で役職毎に運営状況が異なってきたため、ここで改めて全体での確認・統一を取ることができた。役員・部会員各位の柔軟な対応に感謝したい。

同じ頃、院生部会から毎年度刊行している『緑岡詞林』について、先の四十三号・四十四号の大学図書館へのリポジトリ登録を行った。電子化の権利が院生部会に帰属する四〇号以降、メタデータに加え本文ファイルの追加登録も順次行っているため、学術界における認知度・役割も、より大きなものとなっていくであろう。その他、時期問わず院生の多くが利用する院生研究室は、文学研究科全体で運用案を合議した上

で、七月から利用が再開された。消毒・換気の徹底や、利用者氏名・滞在時間の記録等、十分な対策を練ったスタートとなった。また、実際の運用に際しては、エリアを共有する他専攻間での連携を取ったことが大きかった。前期及び後期開始時の定期的な会議の機会を持ち、互いの利用状況や調整案等を継続的に確認している。これ以上に密接な横のつながりをもって、利用者同士、安心できる環境作りを目指していきたい。

外的環境が大きく変貌した中でも、院生部会としての活動は、こうして揺れ動きながらも変わらず進み続けていくものでありたい。

今年度の学生の活躍

【二〇二〇年度青山学院大学学業成績優秀者表彰】

- ◇学部最優秀賞 佐藤優佳（四年）
 - ◇学部優秀賞 岩田明日花（三年）、大澤実玖（二年）
 - ◇学部奨励賞 岩田優希（四年）、若林楓（三年）、柚木優理菜（二年）
- 【第31回上田三四二記念「小野市短歌フォーラム」(兵庫県小野市)】

◇一般の部 佳作 蒔山智郎(四年)

【第33回夕暮祭短歌大会(神奈川県秦野市・秦野市教育委員会主催)】

◇佳作 石井あづみ(三年)

【杉原ウィーク2020. 第21回杉原千畝記念短歌大会(岐阜県八百津町主催)】

◇学生の部 人道大賞 井藤智也(四年)

世の中のいのちの数だけ朝がある
茹でた卵がまだ暖かい

◇高校生・大学生の部 愛賞 松本のぞみ(二年)

一歩だけ近くに寄った吐く息に乗
るかなしみを預かるために

◇同勇気賞 秋葉翔太(四年)

病床に痛み止め、パン、水、母の
丸文字で書かれている「がんばれ」

◇同優秀作品 堀口元貴(四年)、
蒔山智郎(四年)、岩原綾香(三年)、
三井らん(二年)

【短歌コンクール「八月の歌」(朝
日新聞社主催、岐阜県高山市共催、
高山市教育委員会後援)】

◇一般の部 奨励賞 黄郁婷(博
士後期課程三年)

【詩の街ゆざわ2020】第九回
『短歌会』(ゆざわ小町商工会女性
部主催、湯沢市・湯沢市教育委員
会・一般社団法人湯沢市観光物産

協会・湯沢市雄勝観光協会後援)】

◇佳作 小舟萩(三年)、福井花
菜(二年)

【第14回全日本学生・ジュニア短
歌大会(日本歌人クラブ主催、文
化庁・毎日新聞社・東京都教育委
員会後援)】

◇高校・大学生の部 日本歌人ク
ラブ賞 明石理咲(三年)

コンビニのゴミが散らばる我が部
屋で人生の非常口を探す

◇同優良賞 外垣萌生(二年)

【第25回「前田純孝賞」学生短歌コ
ンクール(兵庫県新温泉町・新温泉
町教育委員会・神戸新聞社主催)】

◇大学生の部 前田純孝賞 米子
恵(二年)

飛び込んで包み込まれる海の青浮
かんで気付くわたしはヒトだ

◇同選者賞 黄郁婷(博士後期課
程二年)

台湾語しか話せない祖母が笑う「笑
う」という字を知らない祖母が

◇同新温泉町長賞 加藤美帆(三年)

新しい家族なんだからお掃除のロ
ボットにスウちゃんと言付ける

◇神戸新聞社賞 李静誼(三年)

マラーイオンに会いにはいかず故郷
の味をとチャイナタウンへ向かう

日本文学科関係書籍

*二〇一九年一月から二〇二〇
年までに出版された日本文学科
専任教員、日本文学科・大学院
日本文学・日本語専攻卒業生が
出版した日本語・日本文学・日
本語教育に関する図書を紹介し
ます。未掲載の書籍については
情報をお寄せください。

《二〇一八年(追加)》

◆杉山和也『現代語訳』十二支考
〈猪〉(電子書籍、Amazon Services
International, Inc.販売、一二月)

《二〇一九年》

◆掛野剛史『水上勉の時代』(田畑
書店、六月) ◆若松伸哉『わたし
と世界を象ることは―昭和一〇年
代の石川淳作品とその周辺』(翰
林書房、一〇月) ◆宮川葉子『楽
只堂年録 第八』(史料纂集)(八
木書店古書出版部、一二月)

《二〇二〇年》

◆小松靖彦編『仙覚』萬葉集註釈
被注萬葉集歌一覽・被注語句索引
(和泉書院、一月) ◆小松靖彦編『戦
争と萬葉集』第2号(戦争と萬葉
集研究会、二月) ◆近藤泰弘他『高
校に古典は本当に必要なのか』(文

学通信、二月) ◆澤田淳他『はじ
めるの語用論 基礎から応用まで』
(研究社、三月) ◆網倉勲『水上
瀧太郎の文学―サラリーマン小説
の誕生』(和泉書院、三月)

日本文学科同窓会から

日本文学科同窓会会長

松岡 嗣直

皆さん こんにちは 日本文学
科同窓会会長の松岡嗣直(まつお
かつぎなお)と申します。コロナ
禍で諸々大変かと思いますが、
『With Corona WITH JESUS』で何
とか乗り切って参りましょう。

ところで、日本文学科同窓会っ
て何? という方も多いと思いま
す。まずそこから説明して参りま
しょう。

皆さんは「日本文学科HP」の
中の「日本文学科サイト」をご存
知だと思えます。その「日本文学
科サイト」の最初のページに「青
山学院校友会 日本文学科同窓
会」というバナーがあることにお
気づきでしょうか。まずはそこを
クリックしてみてください。

日本文学史

上代・中古文学史

高田 祐彦

中世文学史

佐伯 眞一

江戸時代の文学史

大屋多詠子

近代文学史

片山 宏行

古典文学概論

学問的な視点から見た古典の魅力
と古典を読むことの意義

土方 洋一

近代文学概論

短編小説の世界

日置 俊次

漢文学概論

中国文学が日本文学に与えた影響
について

山崎 藍

日本語日本文学情報処理法

三好 伸芳

コーパスを活用した日本語の分析
方法

近藤 泰弘

日本語史

日本語の歴史について考察する

澤田 淳

表象文化研究概論

表象文化研究の理解と実践

渡部 裕太

日本文学入門

海外から見た日本観・日本論

韓 京子

日本文明史（英語講義）

孫 世偉

文学交流入門

日本文学と外国文学の交流

韓 京子

戦時期の日本と中国の作家交流
（英語講義）

孫 世偉

日本文化文学入門

留学生のための日本文化文学入門

佐伯 眞一

日本文学演習

書物・萬葉・交流の研究

小松 靖彦

『古事記』の精読

金澤 和美

『古今和歌集』の精読

高田 祐彦

『源氏物語』橋姫巻精読

土方 洋一

『枕草子』から古典文学研究に必
要な知識・方法論を学ぶ

津島 知明

『平家物語』の輪読

佐伯 眞一

『秋篠月清集』の精読

館野 文昭

絵巻『道成寺縁起』の輪読

杉山 和也

人形浄瑠璃『義経千本桜』の精読
（前期）／人形浄瑠璃『国性爺合
戦』の精読（後期）

韓 京子

黄表紙『稗史億説年代記』を読む
（前期）／『新造凶業』を読む（後
期）

韓 京子

書簡体小説を読む

大屋多詠子

近代文学研究のための発表・討論

大木 京子

現代短歌の研究と実作

片山 宏行

大正から昭和初期、戦後の評論

日置 俊次

芥川龍之介作品の精読

佐藤 泉

近現代の短編小説の考察

木村 政樹

総合雑誌『文化展望』の考察

西井弥生子

翻訳演習

日本古典文学が外国語に翻訳され
ることの意味、日本語と日本文
学・文化の多様性について

常田 慎子（前期）
緑川眞知子（後期）

中国古典文学演習

中国古典詩歌（楽府、六朝詩、唐
詩、宋詩、宋詞など）の精読

山崎 藍

中国文学・思想演習

漢籍の写本を用いた基礎的な書誌
学の知識習得と調査実践

高田 宗平

文学交流演習

インドに関わる代表的な日中の文
学作品の精読

藏中しのぶ

日本語学演習

語用論の観点から日本語表現につ
いて分析する

澤田 淳

大正時代から現在に至るまでのこ
とばの変化についての検討

中川 秀太

日本語の話しことば、書きことば、
打ちことばの考察

東泉 裕子

日本語学研究の方法論全般について

近藤 泰弘

方言や社会言語学に関する調査・
分析

白岩 広行

日本語・日本語教育演習

「標準語ではない日本語」を対象に
日本語の多様性について考える

白岩 広行

日本文学講読

『夜の寝覚』を読む

千野 裕子

説話世界に描かれる動物たち

杉山 和也

幸田露伴・山田美妙作品の講読

植田 理子

『記』『紀』『萬葉』を読み解く

松田 浩

狂歌の歴史と近世狂歌の位置づけ

牧野 悟資

中国古典文学講読

中国文学作品を分析し、中国文学への理解を深める

山崎 藍

日本語学講読

語彙・文法の面から日本語の歴史的変遷の様相を考える

鴻野 知暁

書道の歴史と実技

書的基本的事項の理解と技法の習得

柳田さやか

中国書道史について理解を深める

鈴木 晴彦

書理論

書の鑑賞方法を学ぶ

加藤 詩乃

日本語教育概論

日本語教育の現状や内容、指導方法について理解を深める

山下 喜代

日本語教授法

「日本語教育」について、基本的な知識・手法を学ぶ

荒巻 朋子

特別演習

『萬葉集』・書物学・文学交流に関する卒業論文作成指導

小松 靖彦

平安時代の文学、及びそれに関連する対象を扱う卒業論文作成指導

土方 洋一

平安時代の物語・和歌を対象とした卒業論文作成指導

高田 祐彦

短詩形文学とそれに関連する作品を対象とした卒業論文作成指導

山本 啓介

主に中世文学を対象とした卒業論文作成指導

佐伯 眞一

近世前期の文学を対象とした卒業論文作成指導

韓 京子

近世後期の文学を対象とした卒業論文作成指導

大屋多詠子

近現代文学を対象とした卒業論文作成指導

片山 宏行

近現代の文化、文学、思想に関する卒業論文作成指導

佐藤 泉

卒業論文作成指導

日置 俊次

主に中国文学を対象とした卒業論文作成指導

山崎 藍

日本語学を対象とした卒業論文作成指導

近藤 泰弘

日本語学関連をテーマとした卒業論文作成指導

澤田 淳

日本語教育や日本語に関する卒業論文作成指導

山下 喜代

日本語教育演習A

中級会話クラスの授業計画及び日本語教育研究法の学習と研究レポートの作成

山下 喜代

日本語教育演習B

日本語教育における学習内容の把握、及び授業計画の立案

山下 喜代

日本文学特講

歴史を生きたる―七・八世紀の激動の中で

三原 裕子

『古今和歌集』の成立・表現

高田 祐彦

『源氏物語』の第二部について

土方 洋一

中世韻文史概説

石澤 一志

源義経の変貌

佐伯 眞一

近世前期文学の諸相

水谷 隆之

『南総里見八犬伝』と八犬士・動物

大屋多詠子

菊池寛の人と文学について

片山 宏行

文学作品から近現代の「生」「死」の概念とその効果、変容を考察

佐藤 泉

横光利一研究―短編小説の世界―

日置 俊次

文学交流特講

多言語・多文化化の進む現代の日本語をめぐる「文学交流」

河路 由佳

日本文学とアジア

中国近代の文学と思想を学び、中国と日本の関係を考察する

吉田 薫

日本文学とアメリカ・ヨーロッパ

翻訳対象とされた近代日本文学の選択・翻訳・編集段階の検討と、翻訳過程の政治的・商業的要素の探究

KHEZRNELIAT, Gregory Warren

表象文化論

能と狂言についての多角的な考察

岩崎 雅彦

近世文学、主に演劇（人形浄瑠璃・歌舞伎）に描かれた事象を表象の観点から分析

韓 京子

明治期における近代劇の表象

阿部由香子

日本文学特講A（集中講義）

日本近代文学をジェンダーの視点・比較文学的視点から理解する

鈴木 直子

中国文学・思想特講

唐代の詩人の作品を学び、盛唐の文化が日本に与えた影響について考察する

高芝 麻子

中国古典文学特講

李白の作品の読解および李白の生涯・伝説・杜甫との交流について

山崎 藍

日本語学特講

電子化コーパスを利用して文法記述を行うための方法論を学ぶ

近藤 泰弘

日本語表現の特徴・特色について考える

澤田 淳

全国諸方言の言語としての仕組みを理解する

白岩 広行

日本語教育特講

日本語の指導項目である文法・文型及び語彙について、その指導内容と方法、教材化について考える

山下 喜代

日本語教育実習

中級会話クラスの授業計画及び上級語彙クラスの開講準備、授業実施、事後評価活動

山下 喜代

日本文学研究のための英語

日本文学を専攻する学生が、英語で書かれた日本文学・文化論を正確に理解し、英語で発信する能力を養成

KHEZRNJEAT, Gregory Warren

音声表現法

状況に応じた音声表現を学び、社会での実践へつなげる

夷石寿賀子

日本語の音声機能を理解する（英語講義）

米山明日香

文章表現法

読み手を意識した文章表現の実践・文章技術の向上

木村 寛子

【研究室だより】

*二〇一九年度三月の卒業生は

一三七名、四月入学生は一二〇

名でした。大学院前期課程三月

修了生は六名、四月入学生は一

名でした。後期課程の修了者は

一名、四月入学者は一名でした。

*二〇二〇年度から新たに非常勤

講師として、阿部由香子、石澤

一志、岩崎雅彦、大木京子、大

堀壽夫、金澤和美、金子明雄、

衣笠正晃、木村寛子、杉山和也、

鈴木直子、高田宗平、館野文昭、

千野裕子、西井弥生子、牧野悟

資、三好伸芳、米山明日香、渡

部裕太の諸先生方にご尽力いた

だいています。

*二〇二〇年度は、大屋多詠子教授

が学科主任を務められました。

*二〇二〇年度は、山本啓介准教

授が内地留学（国文学研究資料

館）のため休講なさいました。

*二〇二〇年度日本文学会大会

（春季）・講演会・総会は、新型

コロナウイルスの影響により中

止となりました。

*二〇二〇年度日本文学会大会

（秋季）・講演会・総会が、一

月二一日にオンラインで開催さ

れました。講演会については本

会報五頁をご覧ください。

*大屋多詠子教授が、青山学院学

術賞を受賞されました。

*佐伯眞一教授・佐藤泉教授が、永

年勤続者として表彰されました。

*副手の梅澤朋代さんが退任さ

れ、四月から本田恵さんが着任

されました。

*二〇二一年三月をもって、日本

語教育学がご専門の山下喜代教

授が、定年のため退職されます。

【編集後記】

ここは本来なら日文委員のみなさんに書いていたところなのだけれど、なにせ2020年度は授業もその他の学生活動も、思い通りに運ばない緊急事態でした。『会報』もいつもなら、紙面に取り上げる事柄は決まっていたのですが、春の日本文学会大会も中止になったように、なにもかも次々と（変更）続きで振り回されました。開き直って（コロナ）シフトとなった次第。10年後には「こんなこともあったんだ」と歴史的記録になれば幸いです。

片山 宏行

編集委員

教員

片山 宏行

学部二年生

伊藤 諒

学部一年生

魚津瑳矢人

会 報 第五十五号

二〇二一年三月一日 発行

波谷区波谷四一四―二五

青山学院大学総研ビル10F

日本文学科学研究室内

編集 青山学院大学日本文学会

電話 (03)3409-1791-17

FAX (03)3409-1800-5